http://f-env.sakura.ne.jp

☆題字の樹木イラストは、環境の三大要素「水・緑・大気」をイメージ

府中かんきょう市民の会

NPO法人　府中かんきょう市民の会会報
2024年 春号 4月10日(水)発行 通巻92号
発行人　小西 信生（府中市四谷6-19-20）
TEL 080-5646-5524
編集人　葛西 利武
（府中市市民活動センタープラッツ登録団体）

多摩川名人をめざそう
最終回／2題

川原の石と多摩川が作った大地

村崎 啓二

2月18日(日)、環境体験学習「多摩川名人をめざそう」の最終回である第7回「川原の石と多摩川が作った大地」が開催され5人の小学生をはじめ、多くの年代の26名が参加しました。

講師は青谷知己先生
石の成り立ち、見分け方などの説明

この企画は、府中かんきょう市民の会が府中市環境保全センターから委託され、昨年5月から7回にわたり開催し、今回が最後の環境体験でした。当日は9:30に、中河原駅前に集合した後、京王線多摩川鉄橋の橋脚付近の河原で、元府中高校地学教諭の青谷知己先生の指導で、石の観察体験が行われました。

最初に青谷先生から川原の石の成り立ち、特徴、見分け方などについての説明がありました。先生の説明から多摩川の府中付近の石は、砂岩、礫岩、泥岩、チャートなど堆積岩がほとんどですが、石英閃緑岩などの火成岩、緑色岩などの変成岩もみられることが判りました。

説明後、参加者が分かれ観察セット(ルーペ、磁石等)を使って石の観察を行いました。川原のあちこちで親子が膝を寄せ合い、石の名前を調べる姿が見られました。

川原での様々な石の説明
右から2人目が青谷先生

多摩川川原での全員集合記念撮影

現地での観察体験の最後に、川原で見つけた火打ち石(チャート＝海の生きものの放散虫の化石)を使い安全な場所で、火を起こす実験が行われました。火打ち石をたたいて、飛ぶ火花に、参加者から驚きの声があがりました。

多摩川の石は奥多摩の山から作られ
府中の大地は多摩川が作った

川原での観察体験の後、京王線・中河原駅前の府中市男女共同参画センター(フチュール)で、青谷先生の「多摩川の石と大地」についての講演が行われました。講演の最後では①多摩川の石は、奥多摩の山を作る石②府中の大地は多摩川が作った、とのまとめがありました。

講演のあと、2023年環境体験学習の修了式が行われ府中市環境政策課柳下課長のご挨拶、当会小西理事長の閉講挨拶と次年度実施予定の環境体験学習の紹介があり、「多摩川名人をめざそう」は、正午過ぎ、盛会のうちに終了しました。

小学2年生、4年生の娘と3人で参加

宮川 美緒

小学2年生、4年生の姉妹と3人で参加しました。学校以外での場所で自分たちの街について学び、学校の先生以外の大人と触れ合う機会を持ってほしく、昨年の夏から不定期に参加しています。

今回は身近な場所である"多摩川の石"がテーマだったので、鉱物・岩石好きな子供たちは何の石を見つけることが出来るのかとても楽しみにしていました。

娘たちはチャート石に関心

先生が石の見分け方をレクチャーしてくたさり、2年生の次女は『これはクギで傷がつかないからチャートかな。これはなんだろう…』とたくさんの石を観察していました。

4年生の長女は、チャートでの火起こし体験が印象に残ったようです。火花は飛ぶものの、なかなか着火せず苦戦していましたが、最後には1人で火をつけることが出来て喜んでいました。

今年は、ヒスイで有名な新潟県糸魚川に行きたいと考えていましたので、更なる石の探究ができればと思っています。この度は貴重な機会をありがとうございました。

近くの公園で、チャート石の火起こし体験。消火用水入りのペットボトルを持った左の橙色コートは、小西理事長

押立町緑地　栄町中央公園
かわごえどう広場

公園清掃の実施状況について

高橋 和夫

3公園で活動

公園清掃は、府中かんきょう市民の会が発足した当時から実施している環境活動である。

現在は、押立町緑地・栄町中央公園・かわごえどう広場の3公園で月2回清掃を実施している。年間では延約250人の参加者である。

押立町緑地

「押立町緑地（押立町1-34-1）」は約2798㎡で、清掃・除草のほか、11月から1月にかけて落ち葉を集めて3年後に堆肥として戻される落ち葉銀行にも参加して、資源の有効活用にも協力している。

参加者は常時5～6人で、毎月第1第3月曜日の8時から早朝のきれいな空気のなかで、会員相互の交流と健康増進に役立っている。また、公園内の花壇の育成にも力を入れ、公園来訪者の目を楽しまさせている。

目下の課題は、清掃参加会員が前年より減少気味であり、広い公園での業務により多くの会員の参加が必要である。

栄町中央公園

「栄町中央公園(栄町1丁目1-1)」は約642㎡で、東八道路と国分寺街道の交差点近くで面積の割合に樹木が多く、秋から冬にかけて落ち葉が多く、ときにはゴミ袋30袋以上にもなる。

また春から夏にかけての除草にも手数がかかり、参加者の高齢化により負担が大きくなっている。

参加者は3名から4名であり、今後のことを考えるとより多くの会員の参加が求められる。実施日は各月第1第3日曜日午前10時からを予定している。

かわごえどう広場

「かわごえどう広場（武蔵台2-29-3）」は、府中市北部の多摩総合医療センターの近くで都営住宅のなかにあり、広さは約234㎡の小規模の公園であるが、園内には2本の泰山木と藤棚があり、泰山木の落葉時は堅い大きな葉の収集には手数が必要である。

実施日は各月第2第4土曜日で午前9時30分を予定しており、参加者は常時2名となっている。

時々近くの住民から「お疲れさまです！」との声をかけられることもあり、励みとなっている。

3公園とも月2回の清掃・除草

3公園とも広さ状況も異なっており、月2回の清掃除草の実施により、当会の趣旨に沿った活動の継続となっている。

最近の参加者の傾向として前年より減少しつつあり、当会発足時からの貴重な活動の存続のためにも、会員の積極的な参加を要望するものである。

令和5年11月末の公園清掃実施状況報告

報告者
高橋 和夫

NPO法人府中かんきょう市民の会は、会発足当時より公園清掃を実施している。現在は、押立町緑地・栄町中央公園・かわごえどう広場の3公園の清掃を実施している。

この活動は当会の環境活動の一環である。環境活動には様々なものがあるが、そのなかでも最も基本的なものといえるだろう。今後とも、継続して実施していく方針である。

令和5年4月～11月までの、8か月間の3公園の実施状況は下記のとおりである。各公園とも前年より参加者が減少しており、会員各位の積極的な参加を期待している。

落ち葉銀行30袋。栄町中央公園での高橋和夫氏

公園名	回数	参加者	平均	実施日及び時間
押立町緑地	16	71	4.4	第1 第3月曜日 午前8時
栄町中央公園	16	51	3.2	第1 第3日曜日 午前10時
かわごえどう広場	16	29	1.8	第2 第4土曜日 午前9時半
合計	48	151	3.1	

会員並びに
非会員の皆さまへ

公園清掃活動に参加しませんか！

葛西 利武

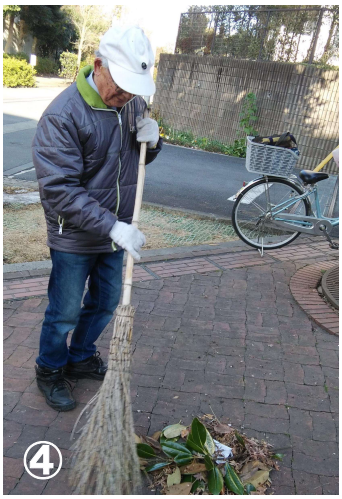
このところ、「環境」という言葉を至るところで耳にします。さらに宇宙環境、パソコン環境なる言葉も耳にします。もちろんそれらも環境問題ですが、一般的には「地球温暖化」や「自然破壊」の環境問題を思い浮かべる人が多いのではないでしょうか。

「環境」は、我々の生活や健康に深く関わり、その保護と持続可能な利用が重要です。環境が悪化するということは即人間の生命にも関わってくる重大問題です。その中でも、身の回りの清掃を含めた「清掃活動一般」は、言ってみれば人類最古の環境活動といってもよいでしょう。

公園は市民の憩いの場であり、かつ美しい景観が重要です。ゴミで汚れた公園はその美観を損ない、市民の健康と幸福にも悪影響を及ぼします。清掃活動はその汚れが常態的になることを防ぎ、公園を美しく保ち、市民に健康的な居場所を提供します。

もしよろしかったら、月2回の活動ですが一緒に清掃活動を行いませんか。希望者は担当の高橋和夫へ連絡をお願いします。 TEL080-8908-6325

なお、非会員が参加を希望されるときは、お手数ですが当会会員になっていただくことが必要となります。



①②栄町中央公園／おもな参加者は倉町三樹、高橋和夫村崎啓二、安田孝夫
③④かわごえどう広場／おもな参加者は高橋和夫、徳永真佐子
⑤⑥⑦⑧押立町緑地／⑤は緑地に咲く花々（モッコウバラ矢車草、パンジー等）。おもな参加者は伊藤久雄、渡部敏郎近くにお住いで応援してくれる女性⑥緑地の標識⑧左側は応援女性

＜敬称略＞

マンツーマン指導

剪定・整枝講習会開催

葛西 利武

第3回剪定・整枝講習会が3月27日㈬9:30～10時45分まで開催された。天候は晴。参加者は当会3人、第一造園6人の計9人。

参加者はマンツーマンの指導を受け、剪定・整枝の技術を大いに学んだ。その技術を持ち帰り、今後の生活に生かしてほしい。右紙面には、参加者の感想文を掲載した。

作業開始前のミーティング

剪定のポイント

①剪定時期の選定

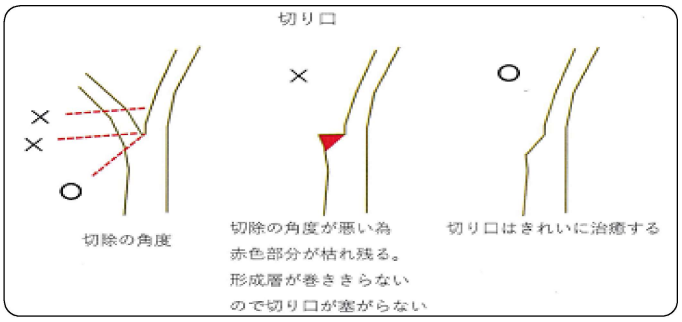
一般的に常緑樹は6月がベスト。それをすぎると暑さの弱まる秋頃10月～11月頃がよい。落葉樹は11月～3月中頃までがよい。

②樹木は骨格を見る

シルエットではなく枝のバランスにこだわる。一見、全体が丸くなって形がよく見えていても枝のバランスが悪いと樹形はすぐに崩れる。細い枝より太い枝のほうが強いため、栄養を持っていかれる。幹から出ている枝の大きさを合わせることで全体のバランスが整い、健全な育成となる。

③切り口にこだわる／下図に示す

枝を切除するときは根元から。中途半端なところで切ると切り口が塞がらなくなり暑さや寒さで幹焼けを起こす。適切な箇所で切除すると、切り口は切った箇所がわからなくなるくらい治癒して塞がる。



④整姿の維持・更新

骨格を造った翌年からは樹形の維持・更新作業が必要になる。剪定された樹木は緑量を増やすため萌芽する。萌芽し、伸長した枝は不必要な枝が多いため、余計な枝は切除し樹形を整える。

講師に付きっきりで教えていただく、実践的講習会は今回で3回目となりました。剪定してきた椿の3年間の成長に寄り添ってきたことになります。
私が考えた合言葉「新芽はそのまま残し、太い枝を剪定する」を唱えながら、自身の剪定力の成長も感じさせてくれた講習内容でした。

こうして見守って頂いた職人さんたちに感謝します。憶えた剪定・整枝方法を今後の崖線の保全活動にも生かしていきたいと思います。ちなみに我が家の椿も今年たくさんの花を付けてくれました。

（浅田 多津子）

初めての参加でしたが、マンツーマンでご指導いただき大変勉強になりました。剪定は陽当たりと風通しよくすることで虫もつかず木が喜ぶ(成長する)と学びました。一般的なことは知っていても躊躇する場面がありましたが、先生の丁寧なご指導もあり、椿の木4本もの剪定を終えました。

剪定後、どの様に変化するか来年が楽しみです。この実体験を一昨年から始めている梅の木剪定に生かします。指導員の皆さま、ありがとうございました。

（牧原 文男）

ハケは野鳥たちの
オアシス

西府崖線 野鳥観察会

田中 香代子

日　時／2024年1月13日㈯ 午前9:00～11:00
天　候／快晴
参加者／会員8名　一般2名　　計10人
コース ／(ハケ下)あずまや→信号機横→わき水前→大山道→(ハケ上に移 動)→ネコノチチ(ネームプレートNo.44)→わき水階段上→西府町緑地
案内人／田中香代子

エノキの枝にドロバチの巣？

ネコノチチの枝にオオカマキリの卵

野鳥はハケの豊かな木の実を食べて育つ

雲一つない好天気に恵まれ、野鳥観察会が始まった。東屋前の用水にカルガモが5羽のんびりと羽を休めている。今季府中用水に水流が全くないため、多い時には20羽近くいることもある。木陰にジョウビタキ(メス)があらわれた。目がくるくると可愛い。キセキレイが用水脇から飛び出し、ガサガサと音を立てて落ち葉をひっくり返すツグミもいた。

今年はツグミの集団が30～50羽飛来し、常に「ケケッ」の鳴き声で賑やかだ。食欲旺盛な彼らの胃袋、西府崖線の豊富な木の実を食べつくすのも時間の問題かもしれない。歩をすすめるうちにヒヨドリの甲高い声と共にウグイスの地鳴きがあるが姿は確認できず。湧水地近くにシジュウカラ、メジロの姿と共に鳴き声も盛んに聞こえてきた。

㊤ツグミ　㊦ジョウビタキ

ハケは低木の樹木も多いため、小鳥たちが棲みやすい

この辺りは低木のサザンカ、アオキ、クマザサなどが多いため、小さな鳥たちが身を隠す絶好の場所かもしれない。エナガもよく見られるのだが今日は姿がない。シメも探すが気配なし。

大山道を登り面白い名のネコノチチ(※)の木にオオカマキリの卵(㊤㊨写真)を見つけしばし見物。今まで見上げていた崖線を上から見下し視界が広がった。霊峰富士も空気が澄んだ今の時季にはよく見える。

あいかわらずツグミの声ばかりだが、コゲラが木の幹をつつきながら虫探しをしている姿にあう。「頭が痛くならないのかなー」との声が・・・足元にはアメリカセンダングサが種を沢山つけて生えている。衣服にその種が引っ付くと、取るのに大変な思いをする・・・クワバラクワバラ！

湧水脇の階段上にやってきた。頭上にはアケビの小さな実が数個ぶら下がっている。未熟な実のようだ。夏に虫たちのレストランとなったクヌギが今は樹液で木の幹が黒くなり、取り付けているネームプレート(No.46)も黒ずんでいる。

すぐわきのエノキの枝に直径約2cmの不思議な球形がくっついている。素材はどうも泥のよう。小さな穴が開いている。「なんだろう？」と、帰宅後調べて見るとドロバチの巣(㊤㊧写真)のようだ。面白い～。

2時間ばかりの崖線散策で、冬鳥の代表選手のツグミを充分に堪能できた野鳥観察会だった。

確認できた野鳥／11種＋外来種 1

カルガモ、キジバト、コゲラ、ハシボソガラス、ヒヨドリ、シジュウカラ、ウグイス、メジロ、ツグミ、ジョウビタキ、キセキレイ、外来種カワラバト

※ネコノチチとは大変珍しい名前であるが、ネコノチチ(猫の乳)はクロウメモドキ科。果実は黒色の長楕円形で、猫の乳頭に似ていることからの名前。
ハケ上の一番西端にあり、当会のネームプレート(No.44)も取り付けてある。

原発事故
未だ終わらず

東日本大震災から13年

前川 浩子

メルトダウン／チェルノブイリ原発と同等の世界最悪レベルの事故

2011年（平成23）3月11日午後2時46分。府中の街中でも大きな揺れを感じた。電信柱が踊り、駐車している車が跳ねていた。向かっていた市民協働センターで見た日本地図、東北地方が津波警報で真っ赤。夫の故郷、岩手県大槌町は連絡が取れず全滅したと報道されていた。

3月12日、津波の映像が繰り返しテレビに現れ、午後3時過ぎ、テレビに映し出された福島原発からは白い煙が湧き上がっていた（筆者提供写真㊦）。1号機で起きたメルトダウン（炉心融解）による水素爆発。「原発事故」、情報がないなか、恐怖で身体が冷たくなったのを覚えている。

3月14日、3号機が黒煙を上げた。チェルノブイリ原発事故と同等の過酷な原発事故だと分かったのは時間が経ってから。津波による大きな被害。亡くなった方も多い。家族、友人、親族を亡くし遠くへの避難。まさか帰れなくなるとは、誰も想像しなかったという。混乱のなかの避難。暮らしが失われてしまった。

私は幾度か福島県を訪れたが、人影はまばら

コロナ禍以前、私はいわき市を拠点に年に何回も福島県を訪れた。福島原発には近づけないが、黒い袋に入れられた汚染土が高く積み重ねられ、ガイガーカウンターが大きく鳴った。

いわき市内では、閑静な住宅地の隣に仮設住宅が並び、悲嘆にくれる人たちがいた。いつ帰れるか分からない。将来が見えない。大きな喪失感を抱いた人たちがいた。

「家が帰還困難地域にあるんだよ」と言うご高齢の方。「お墓詣りに行きたいね」と言っていたが、放射線量が高く帰れない。家、お墓、暮らしを残してきた土地に帰れない。また、帰還困難が解除された地域は、本当に安全なのか。公的な施設が再建されても、人影が少なく子どもたちは帰らない。

福島原発のいま（2024年3月29日現在／ネットから拝借）

原発処理には数十年を要し、天文学的なお金が必要

現在も廃炉に向け作業が続けられているが、放射線量は未だに高い。昨年秋に仕事で訪れた伊達市の駅前には放射線量計があった。原発事故はまだ終わっていない。デブリ（原子炉内に残る溶融燃料）の回収は未だにできず、核廃棄物の最終処分場も決まらない。

そして、昨年8月より汚染水を処理したものを、「処理水」として海洋放出を開始した。今まさに4回目が行われ、2023年に3万1200tが海に流された。海洋環境に影響がないわけがない。漁業者の反対を押し切っておこなわれた蛮行としか言いようがない。

原発処理にこの先30～40年もかかると言われるが、これも定かではない。2023年末で処理には、23兆4000億がかかると試算されている。気が遠くなる金額だ。

今年2月に大分県椎茸農協協働組合と東電の間で和解が成立し、風評被害の補償4億円が払われこととなった。九州まで福島からは遠い。しかし、大きく影響があった。

地震大国日本は、「脱原発」をめざすべきではないか！

原子力は人間がコントロールできるものではない。元旦に起こった能登地震。日本海側には多くの原発がある。地震大国の日本は「脱原発」をめざすべきだ。

首都圏を支えるためにあった福島原発。原発事故で全てを失ってしまった方々のことを、決して忘れてはいけない。

「次世代革新原発」などという言葉に騙されてはいけない。次世代に安全な日本を継いでいくために、脱原発を伝えていこう。